

後守爲忠造進也、爲忠叙正四位下とあると、外記日記、久安四年正月十三日の條に、故丹後守爲忠入道と見えたるに依てなりかし、さて又保延より六十年許後なる六百番歌合接するに建久に、此題を出されたるには、大方は絲ゆふとのみ詠れて、遊ぶ絲とよめるは、少なしが、れば遊ぶ絲の方よりも、絲ゆふはすこし後なるが故に、不審とは云へるにこそあれ、さて此もの、名義を、賀茂翁の説圓珠庵雜記首書に、いとゆふは遊絲を後の世の人の、強てこゝの語めきて云し、俗語なるべし、もし又古へより云たらば、絲木綿ユツの意にて、ゆふの絲に見なしたるか云々といはれたるは、まづはよろしげに聞えたる物から、猶よくおもふに然るべからず、春村川黒つら／＼稽ふるに、空穗物語祭使の卷二十に、かくゆふぐれに按ずるに六月つきむだちみすあけて、いとゆふのみき帳ども、たてわたし云々とあるは、陽炎をいふ絲ゆふにはあらねど、此名の物に見えたるなるべし、さて是を故細井貞雄が比較せし古鈔本には、いとゆひのみき帳とあり、是に依てはじめてしりぬ、絲ゆふは原絲ゆひなりしを、よこなまりたるものになむありける、凡て几帳は一幅一幅の上に、絹の平縫の細紐をたれたると、又絲を幾筋も結びたれたると二様ありて、其絲をゆひたれたる方を、絲ゆひの几帳とは云なるべし、但是を訛謬て、絲ゆふと呼なれたるも、既くよりのならひと見えて、祭使の流布本には、まか見え、榮花物語音樂の卷五にも、いとゆふなどのすそごの御几帳、むらごのひもぐして云々と見えたり、根合卷四十六左に、紅のうちたるふたあひのふたへも、猶考ふ猶雅亮裝束鈔下に、絲ゆふむすびの狩衣とあるは、其露の絲を云へるなるべし、略註、儲又陽炎を絲ゆふといふは、上件の絲ゆふによそへて、呼そめし物なるべし、さるは此陽炎の異名を、遊絲といへるに由あればなるべし、但しまことの和名は、萬葉にかぎろひと見ゆれど、中昔はかげろふと呼びしを、白河帝の御世などにて、も有べし、又絲ゆふとも名付そめたり、此ほどにやとおもはる、ゆゑは、狹衣卷一之上二十に、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、びんづらゆひていひ